

令和2年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者制作総合研究事業(身体・知的等障害分野))

研究課題名(課題番号): 障害者の高齢化による状態像の変化に係るアセスメントと支援方法に関するマニュアルの作成のための研究(20GC1004)

分担研究課題名: 高齢障害者の認知症による行動・心理症状に気づき対応するためのプログラムの実用化に関する研究 — 東京都で導入・普及している「DEMBACE」を基に—

主任研究者: 日詰正文 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

分担研究者: 西田淳志 (公益財団法人東京都医学総合研究所・社会健康医学研究センター)
祐川暢生 (社会福祉法人侑愛会)

研究協力者: 古屋和彦 (国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

高齢化に伴い知的障害者においても発生する認知症の心理行動症状を捉え、その背景要因を分析や、支援計画を適切に作成することは、障害者の高齢化や障害福祉サービスでの高齢期対応の増加が見込まれる現在、重要な課題となっている。本研究では、東京都が導入・実施している認知症患者へのケアプログラム「DEMBACE」を参考にした高齢期の知的障害者の支援を検討した。

具体的には、高齢期の知的障害者の行動心理症状に対して、①観察・評価、②行動の背景要因の抽出、③ニーズ分析、④ケア計画の策定の4つのプロセス(PDCAサイクル)を丁寧に進めることで適切な支援の提供を行うことを目指して、研究者や支援現場の職員等と議論を行い、暫定的に高齢期の知的障害者向けのケアプログラムを作成することができた。

A. 研究目的

1. 背景

高齢期の知的障害者の認知症に関する先行研究は数少ないが、これまでは単なる機能低下と捉えられ、認知症という意識が持たれてこなかったこと、障害者支援施設を利用している知的障害者の認知症患者は、年々増加傾向にあることが報告されている(四方田2018)。

認知症ケアとして成果を上げている取り組みとしては、東京都医学総合研究所が開発した日本版BPSDケアプログラムDEMBASE(DEMENTIA Behavior Analytics & Support Enhancement)がある。DEMBASEは、認知症患者に関わる介護職が患者のBPSD症状の有無や程度を評価—背景要因を分析—介護の計画に反映—具体的なケア計画に繋げるといったPDCAサイクルに沿ったケアプログラムの導入・普及を推進し(東京都医学総合研究所2020)、患者の症状や、関係する職員の心理的負担の解消につなげており、その内容は知的障害者の支援において

も参考になるものである。

2. 目的

本研究では、「DEMBACE」を参考にして、知的障害者の心理行動症状に対する適切なアセスメントや支援を行うためのプログラムを開発し、実用化に向けたマニュアルを検討することを目的とした。

B. 研究方法

研究者と障害福祉現場職員による資料収集と分析、プログラムの検討を行った。

資料収集は、①DEMBASEに関するものは東京都医学総合研究所、②知的障害に関して心理行動症状の評価を既に行っているスウェーデンの研究チームと連絡を取りつつ、情報提供や使用許可を得る作業を行った。

プログラムの検討は、DEMBASEを参考にして①観察・評価、②行動の背景要因の抽出、③ニーズ分析、④ケア計画の策定の4つのプロセス

を、知的障害者支援の現場ではどのように行うのがよいか、使用するツールやプロセスを辿る歳の仕組み（チーム作りなど）をどうするかを中心に、分担研究者・研究協力者とディスカッションを行った。

C. 研究結果

①観察・評価

・DEMBACE では、BPSD の心理行動症状の有無を NPI (Neuropsychiatric inventory) を用いて確認している。具体的には、「妄想」、「幻覚」、「興奮」、「うつ」、「不安」、「多幸」、「無関心」、「脱抑制」、「易刺激性」、「異常行動」、「夜間行動」「食行動」の全 12 項目である。

・また、スウェーデン Orebro University (Lars-OlovLundqvist) らの研究グループでは、2020 年に NPI 指標を基として知的障害者向けに「自傷行為」および「衝動的なリスクテイク行動（結果を考慮せずに行われる、健康と安全に有害とみなされた行動）」を追加した NPI-ID を開発している。

・この NPI-ID について、本研究班として著作権所有者、研究報告者と交渉を行い、使用許可を得た。

②行動の背景要因の抽出

・DEMBACE の作業プロセスでは、心理行動症状整理の次の段階として、背景要因の分析が重要になる。具体的には、「身体ニーズ」16 項目、「姿勢」1 項目、「環境」6 項目の計 23 項目について、様々な関係者が情報交換をしながらどのような背景要因が存在しているのかを、チームとして整理する。

・知的障害者の場合も同じ項目で分析を行うのがよいのか、さらに追加をした方がよい項目があるのかディスカッションを行い、NPI-ID を参考にした「自傷行為」および「リスク行動」の 2 項目を追加した 25 項目で、心理行動症状の背景要因を分析することとした。

③ニーズ分析

・抽出できた背景要因については、関係者の対応と結びつけやすくするため、「内的環境」、「外的環境・状況」の二つに分けて、支援ニーズとして整理することとした。

④ケア計画の策定

ケア計画の策定については、DEMBASE で実際に行われている「だれが読んでも分かるように、50 字以内で記載すること」「〇〇の症状には、〇〇な背景要因があるのではないかと考えられる。そのため〇〇な支援を行う必要がある」など、仮説を基に根拠を示した計画を立てることとした。

D. 考察

今回の研究で整理した知的障害者向けのツール(図 1)は、まだ仮装の段階のもので有り、今後実際の現場での試行をおこなう必要がある。

E. 結論

既に地域実装化が進められている DEMBACE に若干の追加をすることで、知的障害者の支援に導入できるプログラムになると考えられた。

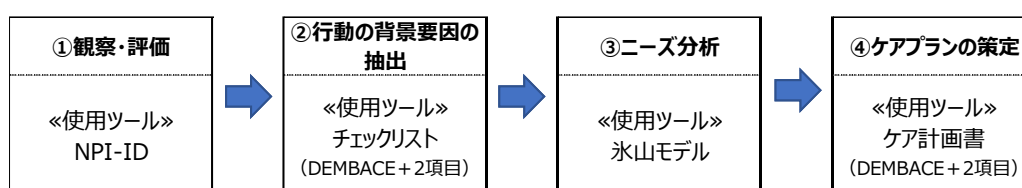


図 1 高齢障害者向けの「BPSD ケアプログラム」のプロセスと使用ツール

【文献】

- 1) 四方田武瑠、登坂庸平ほか：認知症の診断名別に見た知的障害者の行動の変化と支援に関する研究. 国立のぞみの園紀要, 11, p 165-170. (2018)
- 2) 東京都医学総合研究所：認知症 BPSD ケアプログラムの広域普及に向けた検証事業報告書（令和元年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業）. (2020) <https://mentalhealth-unit.jp/file/154>
- 3) Cummings, J. L., Mega, M., Gray, K., Rosenberg-Thompson, S., Carusi, D. A., & Gornbein, J. The Neuropsychiatric Inventory comprehensive assessment of psychopathology in dementia. *Neurology*, 44(12), 2308-2314. (1994)
- 4) Lars-Olov Lundqvist, Jenny Hultqvist, Eva Granvik, Lennart Minton, Gerd Ahlström : Psychometric properties of the Neuropsychiatric Inventory for adults with intellectual disability. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities* Volume 33, Issue 6 p. 1210-1220. (2020)

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし